

## 台湾の小学生とのオンライン交流を活用した英語授業の試み： 非英語母語話者間における「国際共通語としての英語」の可能性

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 武蔵野大学教育学研究所 公開日: 2025-11-05 キーワード: 作成者: 中川, 洋子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2000736">https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2000736</a>

# 台湾の小学生とのオンライン交流を活用した 英語授業の試み

—非英語母語話者間における「国際共通語としての英語」の可能性—

## A Case Study of Teaching English with Online Interaction to Elementary School Students in Taiwan: How to Use English as a Lingua Franca for Non-Native Speakers of English

中川 洋子\*

NAKAGAWA Yoko

### はじめに

本稿は、授業改善の一環として、筆者が担当する英語の科目を英語学習への動機づけと、「国際共通語としての英語」との関わり方の観点から検討するものである。

筆者は「Comprehensive English」や「英語学」等の授業を担当しており、教員養成の学科の科目において次の点を授業の基本的な問題ととらえ、その改善に取り組んできた。すなわち、①授業は将来的に小中高の子ども達や生徒に英語を教える学生を対象にしているが、学生が授業外で日常的に英語に触れる機会を十分に提供できていないこと、②カチュールの主張する三大円<sup>1</sup>のうち、Expanding circleの国々の一つとして、日本で英語を外国語の一つとして学ぶことの意義について考えること、③筆者の研究テーマである「自ら進んで対話しようとする意思」(Willingness to Communicate)の観点から、授業内で英語を自ら使いたくなるような状況を作ること、という問題である。

このような問題に対して、今年度は台湾の元小学校校長のご協力で、授業内にオンラインで本学学生と台湾の小学生との交流に取り組む機会が得られた。英語を外国語として学ぶ非英語母語話者同士のやりとりと、教師を目指す学生として小学生と関わるという観点で、筆者が継続して研究を行っている日本人の英語観分析の点でも有意義な試みとなった。試行錯誤の実践であるが、台湾の先生方とも随時意見交換を行なって改善しながら回数を重ねていった。本稿では今回の取り組みを示し、今後の課題を明らかにしたい。

## 1 本実践の背景と意義

### 1.1 本実践に至る経緯

筆者が所属する教育学科では、2年生の学生が毎年「教育プレ実習」という科目で山の学校（奥

---

\* 武蔵野大学教育学部

多摩・八ヶ岳)と海の学校(鴨川・瀬戸内)の4ヶ所に分かれて宿泊学習を実施している。内容は場所によって異なるが、その到達目標は主に以下のように示されている。

・関心・態度・人格の到達目標:

学校教育に興味・関心をもって主体的に授業に参加し、小学校の教員としての自覚を高めることができる。【人格形成・使命感】

・交感力・発信力の到達目標:

自然体験活動や事前学習に進んで参加し、教育者を目指す者としての自覚を深め、実践的態度・能力の基礎的な力を培う。【コミュニケーション力】(本学シラバスより抜粋)

これらの「小学校の教員としての自覚を高めることができる」と「実践的態度・能力の基礎的な力を培う」という目標を、英語の授業を通じて達成することはできないかと考えていた矢先に、筆者が所属する研究会を通じて台湾の元小学校校長王緑琳氏と知り合うことができた。当時彼女は新北市内の小学校と日本の小学校とのオンライン交流先を探していた。筆者はこの「教育プレ実習」と同様の目標のもと、英語の授業内で台湾の小学生とのオンライン交流が実現すれば、学生にとっても台湾の子ども達にとっても外国語として英語を使う良い機会になるのではないかと考えた。そこで大学生と小学生との関わりで問題ないかどうか王氏に問い合わせたところ、ご快諾をいただいた。王氏も大学生と小学生という年齢も校種も異なる者同士の交流は初めてのことであったが、教師を目指す学生の力になりたいと言ってくれた。また、台湾は海外の国々との英語による交流に力を入れていることからオンライン交流の知識や実践が豊富で、多くの助言をいただくことができた。そこで2024年度後期の授業にて、この交流に名乗りを上げてくれた台湾の小学校5校と筆者の授業を履修する学生とでオンライン交流を行うこととなった。

## 1.2 本実践の意義

筆者は、①授業は将来的に小中高の児童、生徒に英語を教える学生を対象にしているが、学生が授業外で日常的に英語に触れる機会を十分に提供できていないこと、②カチュールの主張する三大円のうち、Expanding circleの国々の一つとして、日本で英語を外国語の一つとして学ぶことの意義について考えること、③筆者の研究テーマである「自ら進んで対話しようとする意思」(Willingness to Communicate)の観点から、授業内で英語を自ら使いたくなるような状況を作るなどについて授業の基本的な問題ととらえ、その改善の方法を模索してきた。そこで台湾の小学生との交流によって、学生の英語学習への動機づけと積極的な英語使用のきっかけとなることを目指し、本実践を試みることにした。

本実践の意義は2点ある。

### (1) 同時双方向型のオンライン授業の試み

学校間の交流として、国内外の学校間の現地派遣や受け入れ、オンラインによる交流は以前から行われている<sup>ii</sup>。しかしコロナをきっかけに国内の学校でのオンライン授業化が必須となり、オンライン交流の環境整備が急速に進んだ。また、従来から対面で行われていた交流が実施できなくなったため、その代替措置としてオンライン交流の必然性が高まったことも最近の増加傾向

の要因である<sup>iii</sup>。

ところで、海外の学校とのオンライン交流は、オンデマンドや同時双方向型を中心に行われている。前者の方法では、双方がそれぞれ事前に準備したセリフを読み上げたり暗唱したりしてビデオメッセージを伝える方法で行う場合が多い。あらかじめ時間配分や提示資料も十分準備した上で行うため、アドリブも不要で失敗も少なく、英語の初学者にも取り組みやすい。一方後者の方法では、ネット環境の不具合や相手の英語がうまく聞き取れないなど、準備していた内容の進行中に臨機応変の対応が求められる。本実践では、「自ら進んで対話しようとする意思」(Willingness to Communicate)を求める観点から、「教育プレ実習」で学生が小学生に対して模擬授業を行うスタイルを継承し、指導案に基づいて子ども達の様子に柔軟に対応しながら同時双方向型で進める授業を試みた。

## (2) 英語を外国語として学ぶ学習者同士の交流

本実践は、台湾の小学校の英語の授業の時間をお借りして、本学学生がオンラインで模擬授業を行うという方法で実現した。先方の小学生の英語力が日本の小学生の英語力と同等であったため、学生は日本の小学生を対象に英語の授業を行うイメージで臨むことができた。また、学生は「ありがとう」や「いただきます」などの日本語の挨拶を、台湾の子ども達は、中国語の挨拶を英語で教え合う活動を含めた。英語を外国語として学ぶ学習者として、双方の母語を尊重する姿勢と母語を英語で説明できるという体験を目指すと同時に、教職を目指す学生が、「国際共通語としての英語」の重要性と英語を母語としない話者同士で英語でコミュニケーションをとる意味について、考えるきっかけとしたいというねらいがあった。

## 2 これまでのオンライン交流の実践

従来から教育現場における日本と海外のオンライン交流の実践があり、コロナ禍ではその必然性や効果が認められ、多くの小中高、大学等でオンライン交流が行われている。小林、古谷、田淵（2023）は、香港と韓国の小学生と日本人小学生のオンライン交流について、英語スピーキング力や英語、外国への興味・関心の変容を検証し、英語力と動機づけに効果的であることを実証し、短期的ではなく、中期的な継続の重要性を示唆している。藤木（2021）は、教員養成系大学の学生に「普段から日常的に英語に触れる機会を学生らに提供していく環境作り」(p.117)を目指し、大学3年生とアメリカの小学生との「国際共同企画」を試みた。その実践はすでに対面交流で訪問したことのある小学校2校との交流で、コロナ禍で対面での実施が不可能になったためオンラインで実施したものであった。

一方で、国際交流のできる日本の小中学校が少ないという指摘（林、2021）もあるように、国際交流の実施状況には自治体による差があることは否定できない。しかし、文化紹介や手紙の交換などは、主に同じ校種や同学年同士の交流を中心に以前よりも増加している。また、単発の交流ばかりではなく、オンライン交流後、修学旅行の機会を利用して交流校を実際に訪問する学校もあるなど、持続的な取り組みを行う学校も増えている。事前に小学校とオンライン交流をした台湾の大学生が日本でインターンシップを行う際に、オンライン交流を行った小学校を訪問し、

台湾と日本の共通点や相違点についての発表を行ったり、一緒に給食を食べたりするという実践も行われている<sup>iv</sup>。

本実践ではこれまでのオンライン交流の実践に学びながら、日本の大学生と小学生という異年齢の交流がまだ少ない中、「教育プレ実習」の模擬授業に近い形で本学学生と小学生とのオンライン交流を試みた。

### 3 非英語圏の学校との交流の意義

なぜ英語圏の国々ではなく台湾の小学生との交流を行うのか。この点について、まず台湾の英語教育事情を概観する。台湾では従来、日常生活での英語の必要度は低く、学校教育の教科の一つとして学ばれてきた。しかし、2002年世界貿易機関(WTO)への加盟をきっかけに台湾政府が「英語生活環境建設批准計画」を打ち立て、その後は公文書に全て英語が付記されたり、台湾独自の英語力検定試験が開発されるなど、英語を重視する風潮へと変化した(後藤、2005)。林(2021)によれば、台湾の教育部(日本の文部科学省に相当)では、2011年に『小中学校国際教育白書』(国際教育1.0)、さらに『小中学校国際教育白書2.0』(国際教育2.0)を打ち出すなど、実施成果を検証しながら国際教育の推進や小中学校教員の専門職性を高めるなどの方策が進められたとのことである。ただ、日本と同様に国際教育交流・推進には様々な課題も抱えていると指摘する(林、2021)。このように、英語を外国語や第二外国語として学んでおり、英語学習における様々な苦勞も共有できる環境で本学学生が授業を参観し、現地の児童と英語を通じて交流を行うことは、英語力向上への動機づけや教授法についての意見交換、教職への意識を高める機会にもなる。台湾での研修が、学生が教職に就いた時の英語教育実践の重要な示唆となろう。

学生が将来教師として生徒や子ども達に教える英語は、英語母語話者の英語だけではなく、非母語話者同士の「国際共通語」としての側面もある。日本と同様に外国語として英語を学ぶ学習者である台湾の小学生に英語を教える経験は、「国際共通語」としての英語が、日本語話者ではない人と意思疎通するための有効な手段であることを実感する機会となる。したがって、学生にとっても英語教員として「国際共通語」としての英語とどのように関わっていくかについて、考えるきっかけになってほしいというねらいがあった。

### 4 オンライン交流の企画

2023年の冬から王氏とのメールのやりとりを通じて、筆者の授業を履修する学生と台湾の小学生がオンライン交流を行うという計画を少しずつ進めていった。大学生と小学生の交流は筆者にとっても王氏にとっても初の試みで、しかも学生が小学生に英語で模擬授業を行うという企画も初めてであった。筆者は本学で行なっている「教育プレ実習」のイメージを伝え、教職を目指す学生の学びの一環として、日本文化や日本語を紹介するという目的で何らかの交流ができればと考えた。また、英語を通じてのやりとりとはいえ、非母語話者同士の交流では互いの母語や文化を尊重することが重要であると考えており、台湾の小学生にも中国語を紹介してもらうこととなった。次節では、訪問先の台湾新北市と小学校について簡単に触れておきたい。

#### 4.1 交流先の台湾新北市について

台湾は中国語（台湾では「国語」ともいう）を標準語とし、日常では台湾語、客家語、原住民の各言語も使用される多民族社会である。首都は台北市（人口約 250 万人）であるが、台湾北部に位置する新北市は約 400 万人を有する台湾最大の都市である<sup>v</sup>。2001 年に小学校の第 5 学年及び第 6 学年を対象に英語教育が導入され、2003 年には開始学年を第 3 学年に早めることが決定され、2005 年からは第 3 学年で必修化された。新北市では、例外として第 1 学年から外国語科目が必修化されている。（「台湾における小学校英語教育の現状と課題」文科省（2018）参考資料 4-3 暫定版）

まず 5 月初旬に国際交流を担当する教育学科の英語科教員と台湾新北市政府教育局を訪問し、本学と新北市の小学校との交流について打ち合わせを行った。そこでは新北市の英語教育の取り組み状況について説明を受け、本学学生と小学生がオンライン交流を行う目的や授業の計画等について意見交換を行った。今回の交流の企画では、王氏を窓口し、秋にオンラインで 5 校の小学校との交流を行い、将来的に学生が学校訪問を行うことを検討した。

#### 4.2 交流先の小学校について

教育局を訪問した後、交流先の小学校 5 校を訪問した。5 校の概要は以下の通りである。

- ・新林國小学校（XinLin Elementary School）新北市林口区  
2013 年創立。クラスの 6 割以上が塾に通っており、生徒の英語力もかなり高い様子が見えがえた。まだ新しい学校で、保護者も学校の教育活動に非常に協力的な様子であった。
- ・金山國小学校（Jinshan Elementary School）新北市金山区  
創立 126 年の中規模の小学校。英語は 15 名前後の少人数クラスで行っていた。
- ・瓜山國小学校（Gua Shan Elementary School）新北市瑞芳区  
全校生徒は 22 名。6 年生は 1 名で、マンツーマンで授業を行っていた。
- ・義學國小学校（Yixue Elementary School）新北市泰山区  
1994 年創立。生徒数は約 1200 名。日本の鹿屋市の小学校ともオンライン交流の実績がある。
- ・永福國小学校（Yong Fu Elementary School）新北市三重区  
1981 年創立。生徒の数は 1500 名以上。

#### 4.3 オンライン交流の内容について

王氏とはメールやオンラインで何度か打ち合わせを行った後、8 月末に小学校 5 校の先生方とのオンラインによる打ち合わせを行い、以下のような計画を立てた。

##### （1）交流時間、交流対象の児童

小学校の一コマが 40 分であること、筆者の授業の一部を交流に充てることから、交流時間を 30 分とし、英語を学習中の児童を対象とすることとした。

- ・新林國小 5 年生
- ・金山國小 4 年生
- ・瓜山國小 3～4 年生
- ・義學國小 4 年生

・永福國小3年生、6年生

王氏の提案で、各校で2回ずつの交流を行うこととし、1回目は双方の自己紹介と文化紹介、日本語と中国語のレッスン、2回目は1回目に行った日本語と中国語の復習と日本文化紹介として福笑いを双方で行うというものである。本学の学生は5つのグループに分け、各レッスンの役割分担を決めて参加することとした。

## (2) 日本文化紹介の遊び：福笑い

福笑いは日本文化の一つとして有名な遊びで、小学生にも容易に楽しんでもらえる。顔のパーツの名詞やパーツを動かす時の動詞がわかればよいと、簡単な英語でできること、その場に応じた臨機応変の対応が求められるため、主体的に英語で伝えたいという状況を作ることが可能であるといった理由で選んだ。

また、先に本学学生が指示して子ども達に福笑いをしてもらい、その後交代して子ども達が学生に指示して福笑いをすることで、双方の協力で福笑いを完成させるという同時双方向型ならではの共同作業が可能になる利点もある。

## 4.4 授業準備・授業の流れ

以下の資料は、5校の先生方との打ち合わせで使用したものである。

図1 打ち合わせ資料（一部抜粋）

**A purpose of Lesson 1 and Lesson 2 plans of 2024 online English teaching**

- ▶ The interaction between students in Taiwan and first-year students at Musashino University[MU] who want to become elementary or junior high school teachers after graduation.
- ▶ The introduction + playing games, one of the traditional Japanese games, *Fukuwarai*.

**Key points:**

- The introduction = to get to know each other and each culture
- Playing *Fukuwarai* together = a way to introduce Japanese culture and means a joint effort to create a work of art online.

▶ Teaching practice

**What is Fukuwarai?**

- ▶ It used to be one of the games that families played at New Year's in Japan.

<https://web-japan.org/kidsweb/virtual/fukuwarai/fukuwarai02.html>

▶ 英語で福笑いやってみました！  
<https://youtu.be/yeJ85sKkw98#t=11m40s>

**Teaching schedule**  
10:30-11:00(Taiwan)

Date	School	number of the students	MU students (42)
10/7(MON)	新林國小		Group A-1(5)
10/21(MON)	金山國小		Group B-1(5)
10/28(MON)	瓜山國小		Group C-1(4)
11/4(MON)	義學國小		Group D-1(4)
11/11(MON)	永福國小		Group E-1(4)
11/25(MON)	新林國小		Group A-2(4)
12/2(MON)	金山國小		Group B-2(4)
12/9(MON)	瓜山國小		Group C-2(4)
12/16(MON)	義學國小		Group D-2(4)
12/23(MON)	永福國小		Group E-2(4)

**Teaching procedure**

Procedure	MU students & teachers	Elementary school students	Time
Introduction	MU students introduce themselves in English. (Hobbies, favorite food and so on.)		10 min.
one-point language lesson	MU students teach some easy Japanese expression of greetings.	Elementary school students introduce themselves and some Taiwanese cultures in English.	3 min.
		Elementary school students teach some easy Chinese expression of greetings.	3 min.
Closing	As a preview of the next online meeting, MU students show a video of a game, <i>Fukuwarai</i> . New Year's lucky face-making game.		3 min.
		Greeting	2 min.

1) 2nd meeting: 8-9 MU students & ( ) elementary school students

Procedure	MU students' Activities	Elementary school students	Time
Introduction	Greeting		2 min.
		Greeting	2 min.
Introduce Japanese game	MU students demonstrate how to play <i>Fukowaru</i> .		5 min.
	MU students put some parts of the face as they are told.	Elementary school students tell MU students to put parts of the face.	5 min.
	MU students tell Elementary school students to put parts of the face.	Elementary school students put some parts of the face as they are told.	5 min.
Closing	Greeting	Greeting	5 min.

(筆者作成)

Lesson 1 では双方の自己紹介と日本語、中国語や文化の紹介、Lesson 2 では、一緒に福笑いを行う内容を提案した。福笑いがどのような遊びであるかを説明した際、学年によっては英語の指示は難しいのではないかと、台湾の先生方がどの程度サポートすべきなのかなど意見交換を行った。先生方が中国語で相談し合う場面も多く、その都度王氏が英語で整理して説明し直してくださった。このような非母語話者同士の意見交換では、国際共通語の存在意義と、先方の言語もある程度知っておくべきであることを改めて痛感した。

そもそも、同時双方向型オンラインで大学生との英語による模擬授業が成立するのだろうか、福笑いができるのかどうかといった不安以前に、大学と小学校の通常の授業時間内の交流が実現できるのかという懸念があった。日本と台湾の時差が1時間であることも幸いしたが、オンライン交流は、調整次第では実現可能であることが今回の実践で明らかになった。

大学と小学校の通常の授業時間内に複数回の交流を試みた内容を以下に整理しておきたい。

#### (1) 大学の授業内で小学校との交流を行うということ

今回の交流は、日本と台湾の時差が1時間であることも実現可能となった大きな要因の一つである。しかし、大学と小学校の通常の授業期間に2回とはいえ複数回双方の都合の良い授業時間内にオンライン交流を、しかも学生による模擬授業の形態で交流を行うという計画は難しいのではないとも考えていた。筆者の授業は週に1度しかなく、十分な準備の時間の確保が難しいこと、また学生の参加意欲にも差があり、オンデマンドのように十分準備されたスムーズな交流ができるかどうかは全くの未知数であった。入学後まだ半年で指導法も未履修で模擬授業も未経験ではあるが、本学科の「教育プレ実習」の模擬授業のように、子ども達との実際のやりとりから何らかの学びが得られる機会となればと考えた。

#### (2) 実施時間帯

今回の活動は今後のオンライン交流のトライアルの意味合いもあり、時間は30分という短時間で実施することとした。筆者の授業時間は月曜日の2限（10時40分～12時20分）に限定されており、小学校との調整も課題の一つであったが、小学校ではこの時間帯に合う時間割の学年を交流対象とし、3年生以上の子ども達が交流できるよう調整してくださった。台湾の小学校は40分授業であるため、3時間目の授業（10時25分～11時5分）内の30分間で行うこととなり、このような状況から台湾時間10時半～11時、日本時間11時半～12時という時間帯でオンライン交流を実施することとなった<sup>vi</sup>。

### (3) 交流内容

学生42名を5つのグループに分け、それぞれ担当の小学校を決めた。1グループにつき8～9名でリーダーを中心に指導案(略案)を準備してもらった。レッスンは2回あるため、学生は分担を決め、全員が何らかの形で参加できるようにした。大体の段取りは伝えたが、細かなセリフは学生が用意して交流に臨んだ。

授業は上記の資料でも示しているように、Lesson 1では本学学生から最初に自己紹介、日本文化や日本語のレッスン、次に小学生から同様に自己紹介や中国語のレッスンを行う。授業の最後には日本語と中国語の復習、Lesson 2で行う福笑いについて簡単に説明する。Lesson 2では、Lesson 1で紹介した日本語の復習、福笑いの動きのデモ、学生が小学生に指示して福笑いを実践、小学生が学生に指示して福笑いを実践して終了、という内容を企画した。

## 5 オンライン交流の実践

### 5.1 Lesson 1

#### (1) 1校目との交流

\* Google Meetを使用。ノートパソコンのカメラを使用し、学生はマイクで指示。

新林國小は教育力、英語力ともに高い学校で、自己紹介や中国語、台湾の文化紹介は特に英語に堪能な小学生が担当したと推測される。最初の交流だったこともあり、学生は小学生の英語力に圧倒されていた。また最初のグループの学生の参加意欲には顕著な差があり、十分に準備してきた学生とそうでない学生の差が大きかった。先方は海外との交流はすでに経験済みで、パワーポイントによる発表でスムーズに進めていた。全体を振り返ると、学生は大いに健闘したと言える。子どもの発言にはジェスチャーや笑顔を交えながら上手に褒めていた。塾講師のアルバイトや小学校のセカンドスクールのボランティアに参加している学生もおり、子ども達を上手に受け止めていた。

交流後はその場で担当学生の感想を伝えてもらい、さらに担当学生とオブザーバーの学生のふりかえりは提出課題とし、今後の交流に活かせるよう努めた。

#### (2) 2校目以降の交流

2校目以降は1校目と同じ内容で進めるため、まとめてふりかえることとする。

小学校によってはインターネットの接続やカメラ等に問題が生じることがあり、学校間によるネット環境の差も課題となった。また、各小学校によって教員の子ども達への関わり方が異なるため、今後学生側でどのように準備すれば効果が期待できるのかを考えさせられた。教員が子どもを主導して交流に参加すれば、順調に予定を進めることができる。例えば学生が日本語のレッスンをした後、それを教員がさらに子ども達に復唱させて日本語の練習をさせるなどの工夫をしてくださった学校もあった。また、クラスによって学生の声掛けに反応が良い場合と必ずしも良いとはいえないクラスもある。そもそも英語の初学者に対して英語で上手に伝えることがいかに難しいか、ということを学生が痛感した様子がふりかえりからうかがうことができた。



写真1 義学國小の子ども達の自己紹介を聞いている学生の様子



写真2 学生の質問に対して挙手している義学國小の4年生の子ども達



写真3 中国語の紹介をしている金山國小4年生の子ども達



写真4 学生による自己紹介を聞いている瓜山國小の3～4年生の子ども達

## 5.2 Lesson 2

\*カメラはノートパソコンと、スマートフォンのカメラを教卓に設置したスタンドアームに準備。福笑いをする時の手元を写すため、必要に応じてノートパソコンのカメラとスマートフォンのカメラを切り替えながら進めた。学生は前回と同様にマイクで指示。

福笑いの実践については顔のパーツを動かす表現に工夫を要するため、筆者の方で見本の脚本を用意した。学生は自分たちのグループの進め方に合うようそれに変更を加えた。

### (1) 1校目との交流

当初の予定通り、最初に学生が消しゴムを使って顔のパーツを動かす際の英語の表現（例：Move the eraser to the right. To the left. Move it upward. 等）を紹介し、子ども達全員で動かし方の練習を行った。その後、小学生一人が代表で福笑いを担当し、学生の指示によって顔のパーツを動かした。子どもの福笑いが完成すると、指示役を交代し、子どもが指示して学生が福笑いを担当した。無事に完成したら挨拶をして終了、という流れで行った。代表の子どもは英語力が高く、臨機応変に英語を使って学生に指示できていた。

台湾の先生方と学生からのふりかえりで、福笑い前に日本語の復習をすると時間が足りなくなるので不要ではないか、福笑い前に消しゴムで動かす際の英語表現を確認したのはわかりやすくよかった、学生と福笑い担当の子どもの一対一のやりとりになり、その他の子ども達が参加できなかったことを改善したいといった意見が出された。

## (2) 2校目以降との交流

1校目との交流の反省を踏まえ、日本語の復習を省略した。また、学生が子どもに指示する番になった時も、一人の学生と一緒に福笑いをしてその手元をカメラで写した。それによって英語が十分伝わらなかつたり、音が聞こえにくかつたりする時に、どこのパーツをどのように動かしているのかを示すことができた。

### 5.3 学生のふりかえり

交流についての学生のふりかえりは以下の通りである。(同様の内容が多数あったため、代表的なものを一部抜粋した。)

- ・英語でコミュニケーションが取れるのだということが体感でき、もっと英語を勉強したいと思いました。
- ・オンライン授業において進行の鍵を握るのは、リアクションだと感じた。小学校の子どもたちが復唱を求めた際、それに応えるのはもちろんのこと、頷いてみたり、拍手してみたり。大袈裟に見えるかもしれないが、常にオーバーリアクションを心がけていきたい。
- ・反応してくれるのがこんなにも嬉しいものだと思わなかつたので私の中ではとても印象に残る体験だった。
- ・異なる母語を持つもの同士の英語には発音の良さや聞き取りやすさも大切な要因になるのだと考えた。
- ・日本の大学生同士で発表を行うことと、台湾の子どもたちにオンラインで行うことはとても違うな、難しいなというふうに感じました。例えば、電波の状況によって、台湾が、何を言っているのかがわからなかつたり、フリップボードが、見えていなかつたり、行っていることが読めなかつたり等とても難しかったです。
- ・交流校の先生が中国語で軽く翻訳をしたり会話をされていて、子どももそれに中国語で反応していたことで自分たちに反応が伝わって来なかつた。(中略)私は、こういった相手が母国語で反応をしてしまうという現象は、複数人同士で英語を国際共通語として用いて交流する際にも生じる可能性があるのではないかと考えるため、ここに「国際共通語としての英語」を用いた会話の難しさを感じた。さらに、このような問題に対し、こうした問題を解決するには相手の文化を知るだけでは難しいと思うが、相手の英語力に合わせた英語を使い分けていくことで解決の手立てとなるのではないかと考えた。
- ・交流先の学校の子ども達も達がきちんと日本語の言葉を覚えていてくれたのがわかつた時、とても嬉しい気持ちになった。このように、互いの母国の文化とは異なる相手の文化を尊重し合い、大切にしようとする姿勢を持つことで、相手も自分も幸せな気持ちになることができるのだなと感じた。
- ・子どもの動きに一回一回 Good! と大きな声で言ってあげていたのがとても好印象でした。積極的に褒めてあげることで、台湾の小学生たちも「これで合ってるんだな」と安心して、楽しく参加できると思いました。

学生のコメントからは、この取り組みを通じて英語学習への興味だけではなく、オンライン授

業のメリットデメリットや、非英語話者同士で国際共通語の英語を使用する意味などについて考える機会となったことが推測できる。学生が教員になる頃は、今よりも海外とのオンライン交流がもっと進んでいる可能性もあり、彼らが児童、生徒に交流の指導をする機会もあるだろう。今回のオンライン交流の体験が、英語教育との向き合い方の参考になればと考える。

## 6 交流の検証と考察

### 6.1 事前準備について

準備のために十分な時間が取れなかったことが大きな反省点である。学生が授業で集まることは週に1度だけで、メールやラインでは事前の打ち合わせにも限界があった。また、筆者は学生による模擬授業は、教員が大枠を提示しても細かなセリフや進め方は学生の考えを尊重したいと考えていたため、どこまで教員が手を入れるのかという加減も今後の課題だといえる。

Lesson 1 の指導案の内容にグループごとのばらつきが見られたため、Lesson 2 の福笑いでは、授業の流れがわかるように指導案（略案）を学生に配布した。それに自分の言葉で加筆・修正してもらったが、作成した指導案で何度も発音練習や流れを頭に入れるような準備の時間がもっと必要であった。

当日の動きについて小学校側にもお知らせするべく、学生側から指導案を事前に台湾に送ることになっていたが、詳細な授業の流れを事前に準備できたグループは少数だった。そのため、オンライン授業本番では少し段取りが悪くなってしまった場面もあった。

ただ、小学校の中には、学生の日本語レッスンの時にティームティーチングのように学生をサポートしてくださり、そのおかげで子ども達への理解が深まった様子が認められた。限られた準備期間内で、できるだけ双方ですり合わせをしておくことが必要であると痛感した。

### 6.2 各小学校におけるネット環境の違い

小学校ごとにネット環境が異なり、中にはお互いの声がほとんど聞こえないまま時間が過ぎてしまったケースもあった。そのような場合の対応策として、紙やペンで画面越しに意思疎通することを提案をした学生もいた。

### 6.3 考察

授業内交流は、準備や学生の動機づけなどの点でいくつかの課題が残った。しかし、この交流を経験した学生には、将来教員として海外とのオンライン交流の機会があればこの経験を活かしてほしいと考える。

「素直に反応してくれる子ども達の様子や笑顔がとてもかわかった」、「子ども達が反応してくれて嬉しかった」とか、「もっとたくさん褒めてあげればよかった」などの学生のコメントから、オンライン交流が子ども達との関わり方について多くの示唆となったことがうかがえよう。また、子ども達と英語でコミュニケーションをとる必然性に迫られ、英語を使って意思疎通するという行為を自分ごととして捉えることができたという点で、英語を使う意味を考える機会になったのではないか。日本と同様に英語を外国語として学ぶ学習者同士が英語によるコミュニケーション

を行うということに加え、双方の母国語を教え合うという作業を通じて得られる楽しさは、英語圏の子ども達との交流とは異なる点でもある。英語圏の子ども達との交流は、英語を母語とする子ども達が有利な立場になるが、台湾との交流ではその差はさほどない。また、台湾の小学校の教科書の内容は日本の教科書と似ており、大学生が日本の小学校英語を教える状況とあまり差がないといえよう。しかし、日本語母語話者の小学生には十分通じる日本語訛りの平坦な英語は、必ずしも台湾の小学生には伝わらないようであった。そのため「国際共通語としての英語」とは何か、わかりやすい英語とは何かについて、実際の体験を通じて多くの気づきを得られたのではないか。非英語母語話者間の交流は、英語だけではなく、お互いの母語に触れる機会もあり、まさに「英語教育の充実に当たり、「ことば」への関心を高める工夫によって更に外国語の効果的運用に必要な能力を伸ばす」（「これまでの英語教育の改革を経た更なる改善」文科省、2014）ことが可能な機会であるといえる。

授業内のオンライン交流は、時差や設備の問題があるが、工夫次第では通常の授業にオンライン交流の時間を取り入れることが可能であることが明らかになった。ただ、少人数のゼミや英語講座等の学生に比べ、通常の授業を履修する学生の参加意欲に差があった。英語学習への動機づけと共に、「国際共通語としての英語」を使うことへの興味関心を促すアプローチも今後の課題である。

授業内の交流とは異なるが、某大学では、2016年に海外教育事情視察及び小学校英語指導者資格認定講座の一環（実践体験）として、教員養成課程の学生を対象に、台北市立大学で英語教育について研修を行なっている。日本と台湾における英語教育の違いについて学生同士でプレゼンテーション発表の他、教育実習や英語教育、カリキュラムの違い等について、英語によるディスカッションや現地の小中学校の授業参観等を行なったとのことである。

英語教員を目指す学生にとって、英語圏で英語を学ぶ研修に加え、非英語母語話者が英語を教えるという共通の観点からの研修も、今後の英語教育を考える上で役立つのではないかと考える。

## おわりに

以上、本稿では筆者が担当する英語の科目を英語学習への動機づけと、「国際共通語としての英語」との関わり方の観点から検討した。「教育プレ実習」で行う模擬授業に近い形で台湾の小学生に英語を教えるというオンライン交流の取り組みを通じて、英語を使いたくなる状況を作ること、そして英語を外国語として学ぶ非英語母語話者同士で「国際共通語としての英語」を使う意味について考えるという点で、今回のオンライン交流は大きな意味のある活動となった。そして何よりも本学学生と台湾の小学生が、このようなオンライン交流を通じてお互いに意思疎通する機会が得られたことは素晴らしいことである。今後もさらに良い交流ができるよう、改善すべき課題に一つ一つ取り組んでいきたい。

## 謝辞

この度のオンライン交流は、元小学校校長であり国際交流のコーディネートを担当してくださっている王緑琳氏の温かなサポートと激励がなければ実現不可能であった。また、王氏につな

いくださった山口県立高森高等学校の赤松敦子先生にも大変お世話になった。赤松先生は国際交流のご経験も豊富で多くの助言をいただいた。

また、瓜山國小校長の沈美慧先生、金山國小校長の楊智先先生、新林國小校長の盧娟娟先生、永福國小校長の蔡明貴先生、義學國小校長の蕭又誠先生を始め、多くの先生方と児童の皆さんには、多大なご協力をいただいた。この場を借りて心よりお礼申し上げます。

## 参考文献

- 糸岡 夕里、日野 克博（2022）「教員養成段階における小学生とのオンライン交流会の取組：体育授業の実践」『大学教育実践ジャーナル』21,29-34.
- Kachru, B.B. (1985) Standards, Codification and Sociolinguistic Realism: The English language in the outer circle. In R. Quirk and H. Widdowson (eds), *English in the World: Teaching and Learning the Language and Literatures*. Cambridge: Cambridge University Press, 11-30.
- 公益財団法人日本台湾交流協会（2024）「台湾に関する基礎知識」  
<https://www.koryu.or.jp/publications/knowledge/>（閲覧日：2024年11月6日）
- 小林 翔・古屋 雄一朗・田淵 香奈子（2023）「ICTを活用した海外の教室と日本の教室を繋ぐ小学校における国際交流」『実践学校教育研究』25・26,1-8.
- 産経ニュース（2021）「ポストコロナの国際交流教育 オンラインで繋がり強化」  
<https://www.sankei.com/article/20210810-S4UXT7T7KRL4TNMVSELZ3OAOA/>（閲覧日：2024年10月6日）
- 柴田 美紀・仲 潔・藤原 康弘（2022）「『国際共通語としての英語』から考える英語科教育」『中部地区英語教育学会紀要』51,165-172.
- 東京都教育委員会（2021）『国際交流事例集』[www.tiec-edu.metro.tokyo.jp](http://www.tiec-edu.metro.tokyo.jp)（閲覧日：2024年10月24日）
- 東洋経済 ONLINE（2021）「公立も導入『オンライン国際交流授業』急増の背景」  
<https://toyokeizai.net/articles/-/451024>（閲覧日：2024年10月6日）
- バトラー後藤裕子（2005）『日本の小学校英語を考える—アジアの視点からの検証と提言—』三省堂
- 林明煌（2021）「台湾の小中学校における国際教育の現状と課題」日本学校教育学会編集、監修多田孝志『国際交流と学校教育—グローバル時代を共に生きるために—』三恵社
- 平井清子（2017）「台湾における英語教育の実証的研究—学習指導要領準拠版（1983年～2008年）高等学校英語教科書の題材内容の研究から—」『北里大学一般教育紀要』22,67-101.
- 藤木大三（2021）「遠隔によるアメリカの小学校児童との国際共同企画その1」『教育学論究』13,117-130.
- 北海道教育大学（2016）「台湾で英語教育について研修を行いました」  
[https://www.hokkyodai.ac.jp/info\\_topics\\_hue/honbu/detail/2331.html](https://www.hokkyodai.ac.jp/info_topics_hue/honbu/detail/2331.html)（閲覧日：2024年11月26日）
- 文科省（2014）「これまでの英語教育の改革を経た更なる改善」今後の英語教育の改善・充実方策について報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm)（閲覧日：2024年12月1日）
- 文科省（2018）「台湾における小学校英語教育の現状と課題」参考資料4-3 暫定版  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryu/attach/\\_icsFiles/afield-file/2018/02/21/1400673\\_001.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryu/attach/_icsFiles/afield-file/2018/02/21/1400673_001.pdf)（閲覧日：2024年12月1日）
- 横手市教育委員会（2024）「台湾 大同大学との交流」  
<https://www.edu2.city.yokote.lg.jp/asakura-e/school-life/school-life-1268/>（閲覧日：2024年12月2日）

## 注

- i Kachru (1992) は、英語を第一言語として用いる地域を Inner Circle、英語が主に第二言語として話される地域を Outer Circle、英語が外国語として話される地域を Expanding Circle として英語の拡大の歴史的過程を説明した。
- ii 例えば東京都教育委員会ではこれまで、カナダのブリティッシュ・コロンビア州、オーストラリアのクィーンズランド州及びニュー・サウス・ウェールズ州、ニュージーランド、台湾の台北及び高雄、タイ、北京、パリ等の教育行政機関を通じて交流を行ってきた。
- iii 例えば新渡戸文化中学・高校のようなオンラインによる国際交流授業が、多くの学校で実施された。（「公立も導入『オンライン国際交流授業』急増の背景新渡戸文化の夏休みプログラムをレポート」）また、将来的に対面で会うことを見据え、事前のインターネットの交流でお互いの理解を深めておくという点も注目されている。（「ポストコロナの国際交流教育 オンラインで繋がり強化」産経ニュース）
- iv 国際的産学官連携事業の1つである秋田県横手市立朝倉小学校6年生と台湾大同大学の交流事例。大同大学の学生は英語、日本語も堪能で、小学生とは日本語を中心に簡単な英語を交えながら交流したとのことである。
- v 台湾では、日本語は英語について学習者の多い言語である。（公益財団法人日本台湾交流協会）
- vi 台湾では2005年以降、小学校3年生から英語教育が必修化されているが、今回の交流先である新北市では、例外的に1年生から実施している。